

2018年 夏季探査会

夕張古道と

夕張・夕張川沿いのアイヌ語

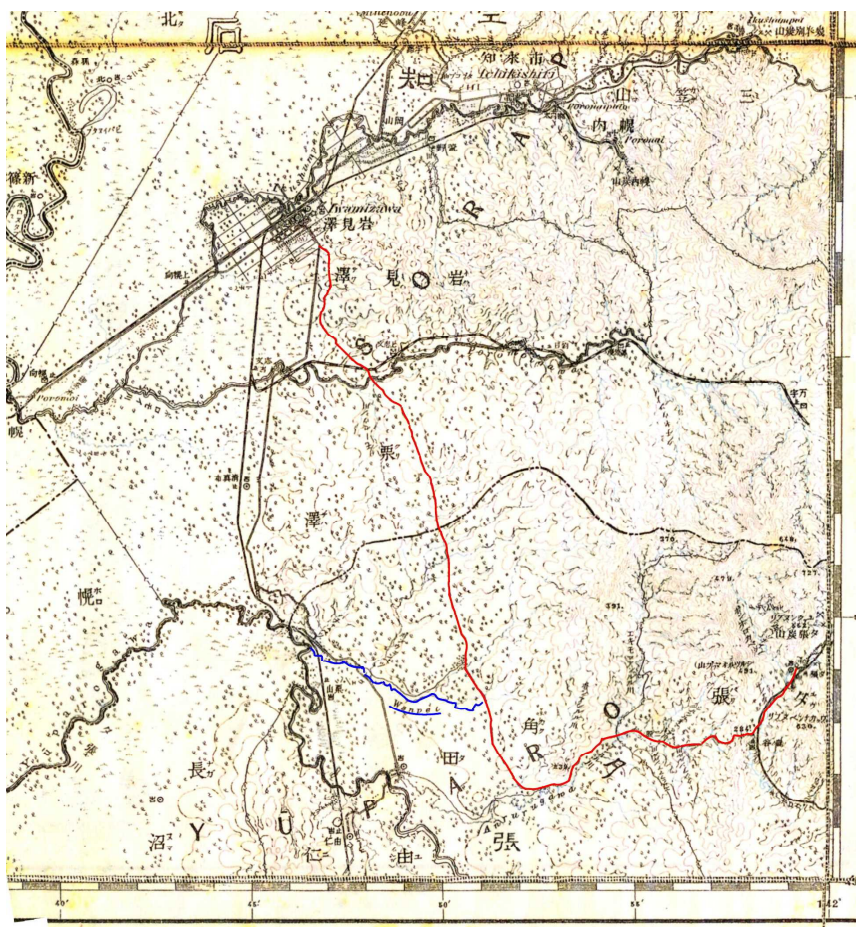


夕張市滝ノ上オソウシ

主催：空知地形図とアイヌ語地名研究会
岩見沢郷土科学館友の会

8月8日 予定

- 9:10 郷土科学館出発
志文
夕張道路を行く
旧渡船場（渡し場）
上幌
夕張古道
継立 夕鉄跡
アノロ川
古道夕張入り口
石炭の歴史村
- 11:50 昼食（屋台村付近）
- 12:50 出発
- 13:30 ブリ山登山
沼ノ沢
滝ノ上
多良津橋
岩内遺跡
- 16:30 頃 帰着

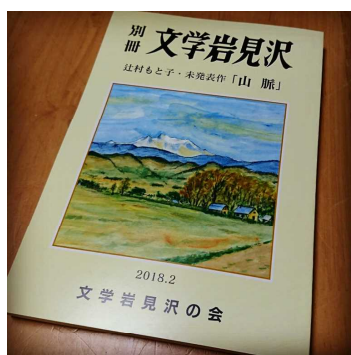


地図は明治29年(1896年)版地形図

青線・赤線は加筆

青線・・・ウエンベツ

赤線・・・夕張への古道



辻村 もと子

(つじむら もとこ) 1906 年
(明治 39 年) 2 月 11 日 - 1946 年
(昭和 21 年) 5 月 24 日)

北海道岩見沢生まれの小説家。日本女子大学卒業。東京大空襲で故郷の岩見沢市志文

に疎開する。代表作に長編小説「馬追まおい原野」があり、それを記念して没後、1972 年（昭和 47 年）8 月 5 日、北海道長沼町の長官山に辻村もと子文学碑「馬追原野」が建立された。1944 年（昭和 19 年）「馬追原野」で第 1 回樋口一葉賞を受賞 「春の落葉」東京詩学協会、1928 「馬追原野」風土社、1942（北書房、1972）「風の街」白都選輯、・・・Wikipedia より



辻村もと子の代表作
「馬追原野」の取材ノート

岩見沢郷土科学館企画展② 辻村もと子の生涯

— 志文が生んだ樋口一葉賞作家 —

2018

2/13[火] ~ 3/25[日]

9:30 ~ 17:00 (火曜日のみ 13:30 ~) 月曜日休館

岩見沢郷土科学館

〒068-0833 岩見沢市志文町 809-1
TEL 0126-23-1770

＜志文川＞

志 文 (しぶん)

所在地 岩見沢市

開駅

明治 35 年 8 月 1 日

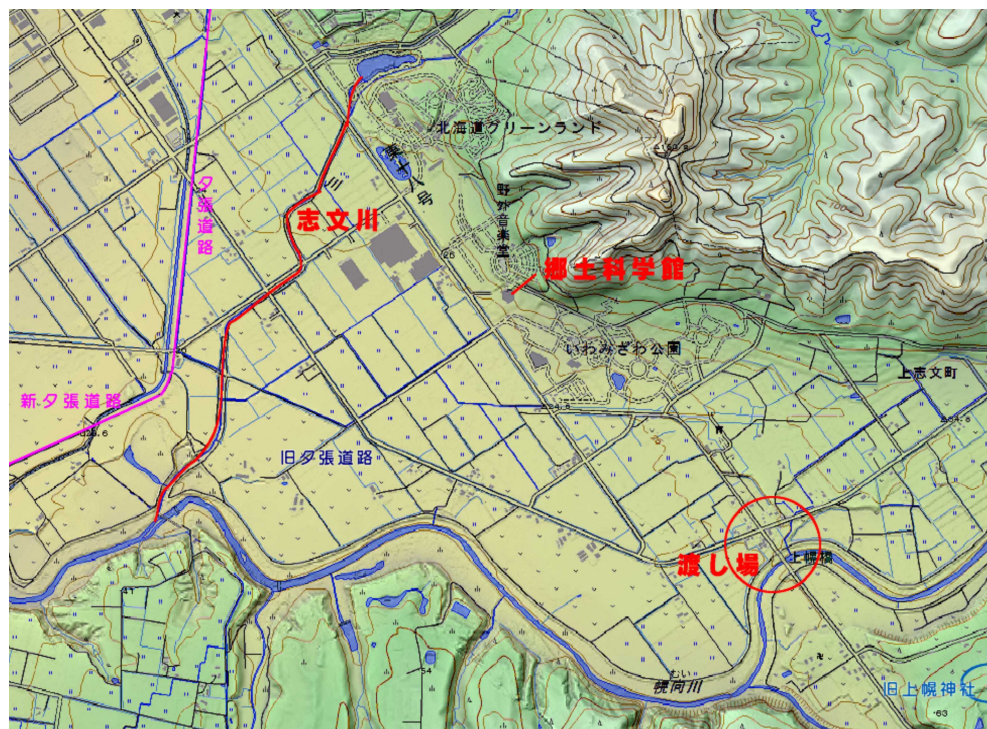
(北海道炭砒鉄道)

起 源

アイヌ語の「シュ
ブン・ペツ」(ウグイ
のいる川) から出た
ものである。

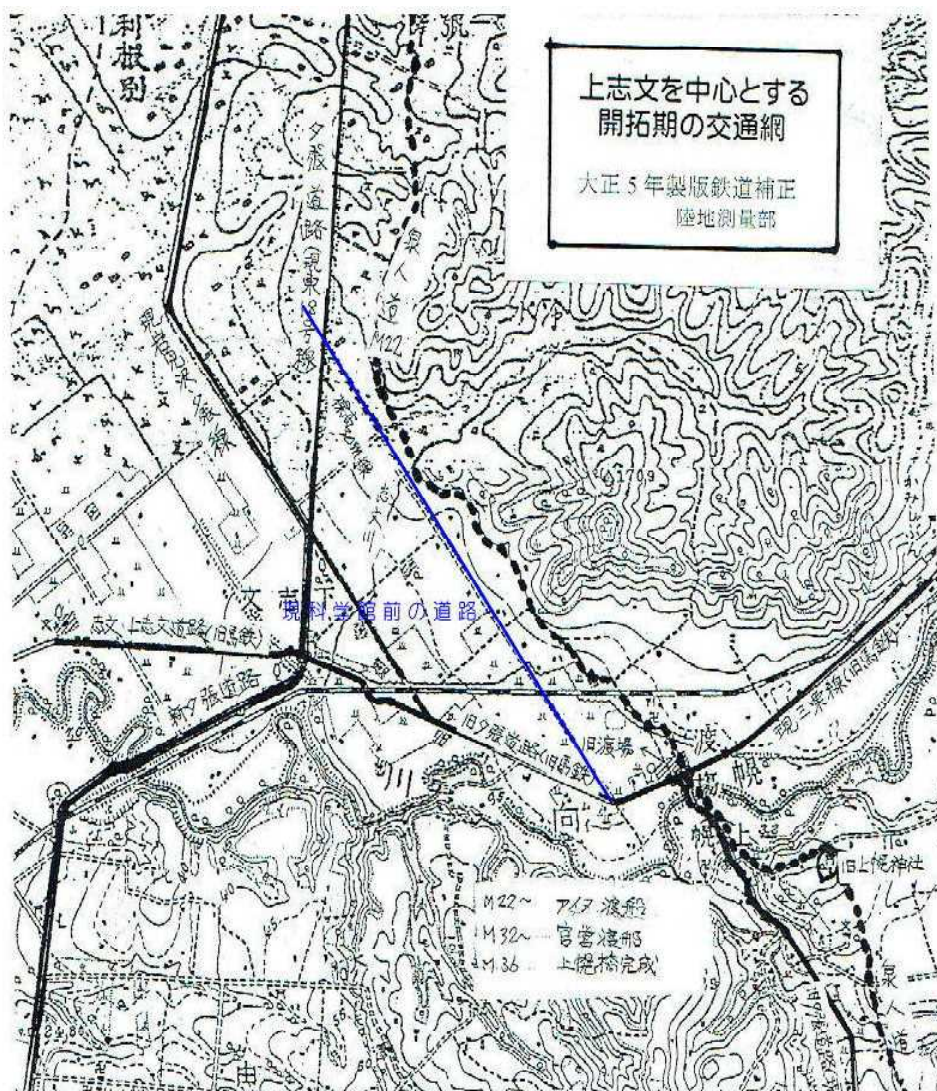
(「北海道駅名の起源
(昭和 48 年版)」日
本国有鉄道北海道総
局 p.76 より引用)

カシミール3D→



大正 5 年 (1916) 製版
鉄道補正との比較

※縮尺が若干異なり、範
囲も少し違います。



＜夕張道路＞ 夕張市史より

明治23年(1890)夕張炭山開坑に着手した(する)のを契機として、岩見沢・角田間の道路開削が企てられた。これがいわゆる囚人道路とか夕張道路と称せられるもので、当時空知監獄署典獄兼空知夕張郡郡長渡辺惟精(これきよ)の配慮によって、囚徒が労役に服したからである。この道路は岩見沢駅前から神社前を右折して教育大前をとおり、冷水の山沿いを行く道で、今でも夕張通りの名が残っているが、冷水から志文を経て万字第2鉄橋付近の幌向川の釣橋を渡って栗沢に入り、耕成神社裏から現在の国道筋に出て、栗丘(クッタリ)に達し、そこから山道を7曲、8曲りして栗山町に抜ける道路で、明治22年に10月に着手して翌23年8月に完成した。この工事は岩見沢から角田まで6里、その間に囚徒を収容する飯場として清真布(栗沢)、栗山トンネルの手前、角田小学校の3力所に草小屋を設けた。1部屋には50人から60人程度で、服装は赤い仕事着、赤い股引、足袋も帽子も同色であった。仕事は排水を掘り、地盛りをしたり、夕張川から手櫓(そり)で砂利を運ぶなど相当な強制労働であった。

この道路のことが「馬追原野」載っている。(辻村もと子著 昭和17年:1942年)

道は、夕張山脈に続く小山の尾根を横切って、去年樺戸の集治監の囚徒たちによって開削されたばかりの、岩見沢から夕張炭山に通ずる新道であった。天然の雑木林の中をまっすぐ切り開き、半里か一里おきに草小屋の茶店があるきりで沿道には一戸の民家も見当たらず、すれ違う人さえもなく、ただどこまでも未開の樹林地と草原野がつづいているばかりであった。◆今年の雪解けは早く、三月の終わりにはどの道もすっかり乾いていたが、この夕張道路は土地が粘土質のため四月になってもひどくぬかっていた。そのうえ馬蹄のあとでこねかえしこねかえしているのだからたまったものではない。凸面に足をかけたと思うとつるりとすべって、ピシャリと泥水の中に足が落ちる。……後から馬子が一人、道に添った林の中を走るようにして、巧に七、八頭の駄馬を追いながら近寄ってきた。これはまだ鉄道が通じない夕張へ物資を運搬する唯一の方法であった。 「馬追原野」

＜志文＞



現在の志文駅。
1902年(M35)北海道炭礦鉄道の貨物駅として開業。
1906年国有化により、国鉄へ
1914年(T3)万字炭山まで開業
構内跡が広く(プラットフォーム5?)往時の面影を残している。

＜志文神社＞M18創建



1897年現在の地に造営

＜旧渡船場＞

上志文から分かれ、上幌へ向かう幌向川付近のバス停である。地元では「渡し場」と呼ばれている、渡し船のあった付近である。幌向川は、当時は流量も多く川幅も広がったと推測される。

幌向川の渡船場は交通の拠点で明治20年頃に坂市太郎が夕張炭山調査のため利用した。夕張炭山が開鉱すると、岩見沢・三笠から栗沢茂世丑・栗沢継立(現栗沢町)を経て夕張に至る近道として利用された。渡船場付近には商店・住居が集まり、木橋が架けられると小料理店・旅館など40戸に及ぶ市街が形成された。(「岩見沢市史」「いわみざわ史郷土」：平凡社「日本歴史地名体系」より転載)



現在の幌向川 渡し場付近



←岩見沢公園方面からの旧道と思われる道：交差点より公園方向を望む



左図は 1901 年に発行されたものである。百万分の 1 に縮小された全道図の一部である。この図にも岩見沢から夕張に至る古道が描かれているのがわかる。(青線) この図は全道版であるため描かれている道路も限られているが、夕張炭山へ至る道として重要として描かれたかもしれない。他、石狩川や夕張川の昔の流れが描かれており、長沼・南幌辺りの大きな沼(三日月湖)からも湿地とわかる。

海岸線は海水面の上下によって大きく変化する。氷河期には北海道は大陸と陸続きになり、マンモスなどの大型動物が移動してきたことが知られている。その後、氷河期の終わりと共に海水面が上昇し、6000 年前頃には現在より数m以上高かったことがわかっている。馬追丘陵の麓の幌内神社と舞鶴の間あたりにはハマナスが自生している。(maw-o-i:ハマナスの実・多い・ところ)ハマナスは海岸で多く見られ、このあたりもかつては海岸だったと推測される。右図は、地名研の水本

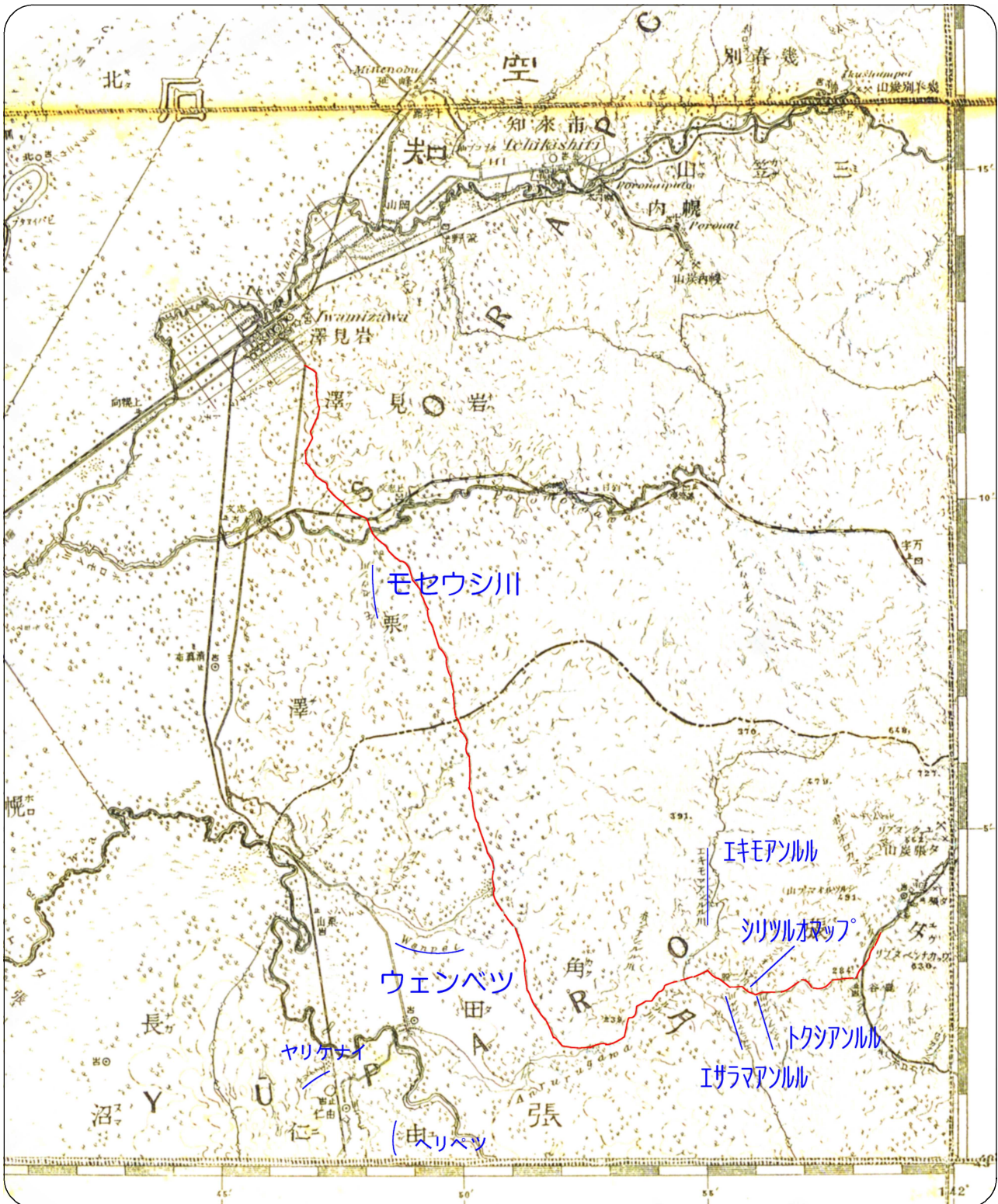


顧問が作成した標高 30m 以下の場所を白くした地図である。かつてはこのあたりまで海だった可能性もあり、茂世丑あたりも湿地だった事と符合

する。花の写真はハマナス (Wikipedia より)



実測切り図に見る古道(1896年:明治29年)



北海道庁が発行した切り図である。この時代のアイヌ語地名が記載されている。

モセウシ (mose-us-i) イラクサあるところ、草刈りいつもするところ

ウェンベツ(wen-pet) 悪い川(何が悪いかは不明)

エキモアンル(e-kim-un-an-rur) 頭が山の方にあるアンルル(川)

エサマアンル(e-sam-un-an-rur) 頭が海の方にあるアンルル(川)

トクシアンル(top-us-i-an-rur) 竹があるアンルル(川) ?

シリツルオマップ(sir-tu-utur-oma-pet) 山の間を通るアンルル(川)

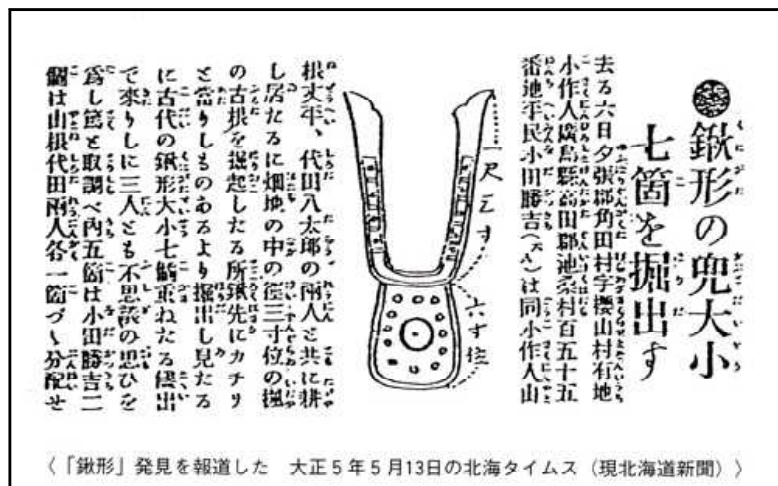
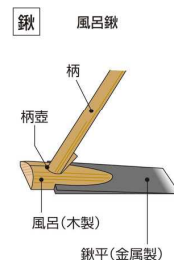
＜アイヌクワガタ＞



「東武」画像

クワガタは兜前面のかざり立物であるが、もともと古墳時代から使われる鍬の取り外し式の刃の部分に似ていることからつけられたものか？

大正5年(1916年)5月に角田村桜山で7個のクワガタ発見の記事が報道された。

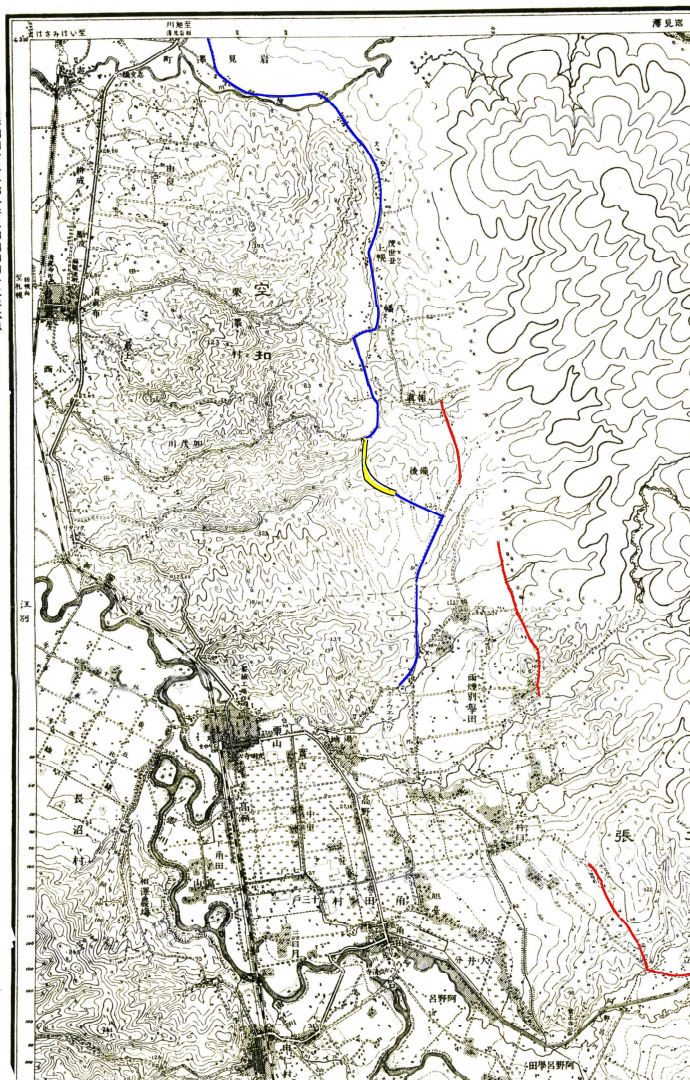


明治43年(1910年)地形図 (上志文～継立部分)

明治43年地図では古道ははっきりせず、現在の三栗線に近い道路が確認できる(青線)。但し、全線は開通しておらず、一部補足している(黄線)。

また、古道に近い道路が示されており(赤線)、道路の開通と馬車等の利用で、もともと徒歩の道だった道路は使用されなくなり道も無くなったと思われる。赤線は、古道に近い道路をたどったが地図から読み取れる部分をたどっただけで、実際の古道かどうかは不明。そのため、途中が途切れたり、あわなくなったりしている。栗山ダムからの川(当時のウェンベツ川)から継立に向かう道は急坂であるが、ガケの形状を考慮すると当時は別の場所から上がっていったと推測される。地図にある橋は、今の道路下流側の同じ場所に架かっている。

桜山小学校付近からクワガタが発見されており、この付近に馬頭観音もあったようだが、この地図には関連する道が示されていない。しかし、桜山小学校辺りの道は、かつて大きな意味があったのではないだろうか。



明治43年(1910年)地形図(日の出～夕張部分)

古道を基にした夕張への道やアイヌ語地名が読み取れる。古道は旧鹿ノ谷小学校へ通ずる二股峠のもとになった道路であるが、現在の道路は、車の通行のため改修したとき、頂上付近は、回り込んで勾配を緩くしている。地図では、ほぼまっすぐ峠を越えて谷を降りている。

青線丸は M29 図では「サンナイ」と記されているが、この図では、鉄道が引き込まれ、炭鉱が記されている。

夕張炭山となっているが、自治体名は「登川村」である。

<シホロカベツ川>

si-horka-pet

si:本当の、大きい

horka: “後戻りする”、「地形では、上流でぐるりと向きを変えて海の方へ向かっていける枝川」(知里真志保地名アイヌ語小辞典より)

※川は、海から山へ登っていくもので下流側から考えている。海は大切な場所で「海へ向かう」ことや「海の方角」を常に意識したと思われる。

夕張川上流部にも「ホロカ」がついた川があり、越えていくと美流渡方面へ抜けていける。

pet:川。ナイも川を表すが、使われた時代や地域に違いがあるようだ。

登川・・・かつて夕張は「登川村」となっていたが、現登川とは違い、本町方面である。元々の志幌加別川を意識し、遡る川から「登川」としたようだ。

<シリツルオマツ山>(sir-tu-utur-oma-pet)

シリツルオマツ川が流れてくる山。鳩の巣山。「白鳥山」の名称もあった。

<ルベシナイ>(ru-pes-nay)

志幌加別川の支流にポンポロカベツ川（ポンは子）があり、その支流にこの名がついている。ルベシベと同様。山を越えて向かう側の土地へ降りていく道のある川。

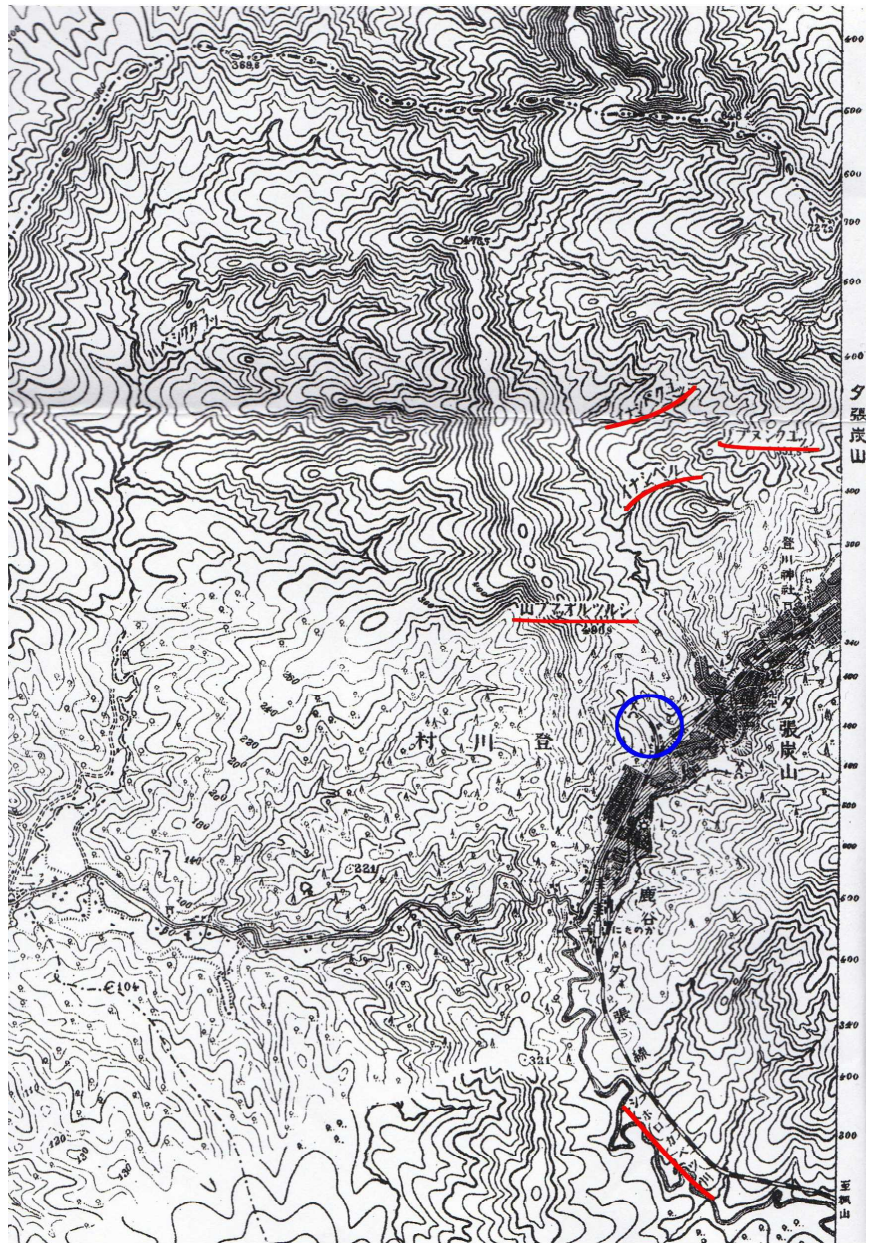
<ユクンヌプリ>(yuk-un-nupuri)

鹿・入る・山

<ユクベシナイ>(yuk-pes-nay)

鹿、それに沿って下る、川

※志幌加別川の上流部も、いくつかの支流があり（サルシホロカベツなど）美流渡方面へ抜けていける。坂 市太郎は、美流渡から夕張に入り、路頭に石炭層を発見した。峠を越える道を示すルベシベの名称がポンポロカについているので、アイヌはこちらから抜けていたのかもしれない。



夕張市内のアイヌ語地名

＜サンナイ＞(san-nay)

サンは「おしだす」という意味で、三内丸山など北海道以外にも見られる地名である。夕張市史には、「サルナイの音便変化」と記され、もともとどちらだったかは不明。「サン」は主に山から浜の方へおしだす、として使われることが多い。この付近には「サルナイ橋(現栄橋)」が架かっており、その下が谷地になることから、サル：葦 だったかもしれない。

＜プトマチャウンベツ＞(put-matiya-un-pet)

夕張炭山東側ズリ山方面の谷から流れてくる川。put:口 matiya:町家 un:ある pet:川。

志幌加別川との合流部に「町家：和人の家」があったらしい。何のため、いつごろについては未詳。夕張は1600年代から古文書に登場しており、金の採掘や1800年代中ごろには材木の伐採記録がある。この「マチャ」は不明。

＜ワカナベヌプリ＞(wakka-nam-pet-nupuri)

現レースイ山。wakka:水、nam:冷たくある、pet:川 レースイ山の裏側から土幌加別川に若菜の南付近で合流している川の流れている山。意識して冷水山とした。若菜は、もともと炭鉱があった時代は若鍋といっていた。



←畠山哲雄さんの絵画
プトマチャウンベツ
方面

末広方面の
ークス炉→

夕張の石炭は
カロリーが高く、
燃料用には向か
ない。原料炭として
ークスに加工され、
製鉄に使用された。
絵画のークス炉は
歴史村駐車場に下
部の窯跡が残って
いる。末広のーク
ス炉は廃炉となっ
ているが、現存し
ている。



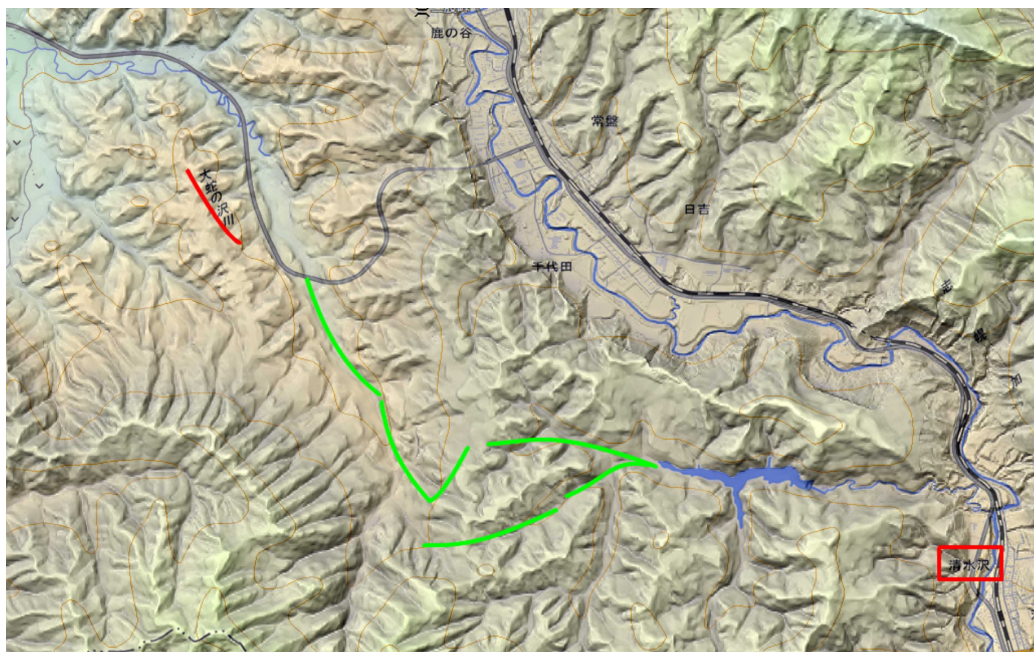
ズリ山(清水沢炭鉱)

1947(昭和22)年開鉱。1944(昭和19)年に開鉱した遠幌鉱と1952(昭和27)年に合併した。近代的な設備を整え、北炭のホープと位置づけられた。生産量は平均して年産40万トンほど、従業員数は1000人弱の中堅炭鉱。7800カロリーの原料炭を生産した。1980(昭和55)年に終掘のため閉山。多くの従業員が夕張新鉱に異動した。

ズリ山とは、炭鉱で採炭した石炭を、選炭工場で製品として生産する石炭と不要な岩石とに選別し、その不要な岩石を捨てるために積み上げた山のこと。清水沢炭鉱のズリ山は3つあり、このズリ山が最も大きく、高低差は60mほど。選炭能力が高かったため、ほとんど石炭は見られない。もともと農地だった平地に積み上げられたため、頂上からは清水沢ダム、旧北炭清水沢火力発電所、90度蛇行する夕張川、清陵町、そして宮前町と清栄町が一望できる。(清水沢プロジェクトHPより)



大蛇の沢（トクシアンルル）



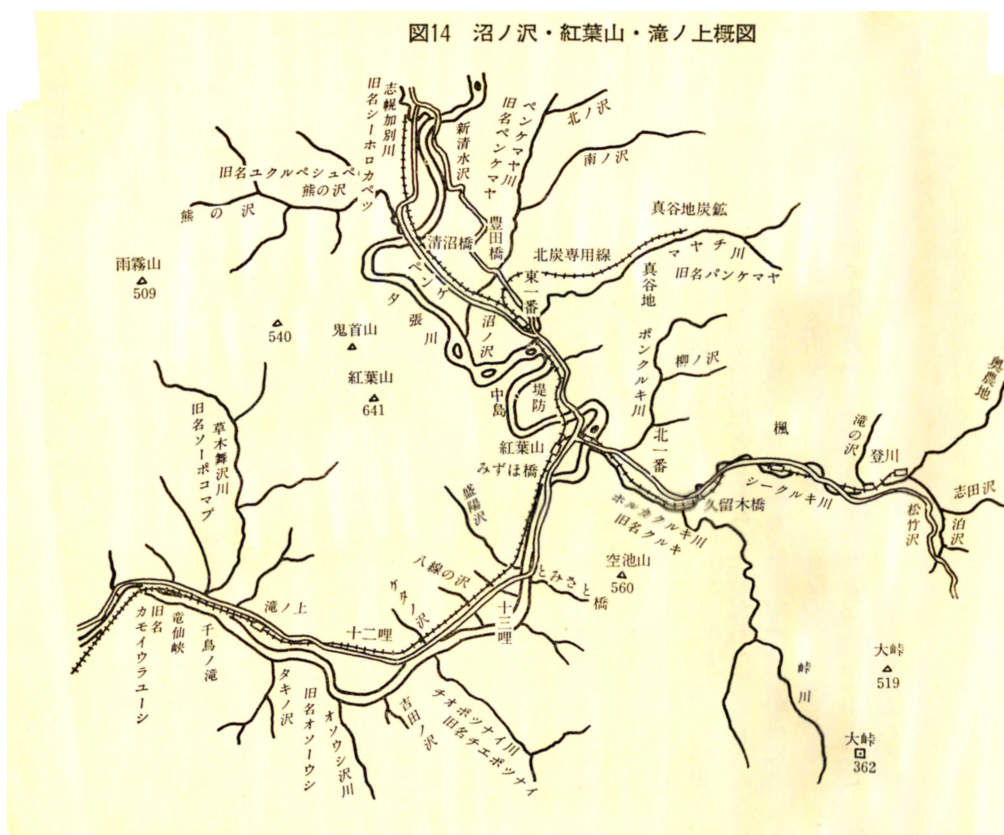
沢の奥へ行き、山を越えると、すぐ、清水沢に抜けることができる（緑線）。清水沢からは、シューパロ湖を抜けて十勝、日高へと繋がっている。また、清水沢から南に抜けると穂別へ通じており、「十勝アイヌが山の方の海の方」と呼んでいた「アンルル」と符合する。

ペンケマヤ川・パンケマヤ（マヤチ川） pen-ke pan-ke

pen-ke: 上流側の

pan-ke: 下流側の

パンケ、ペンケは対になった支流によく見られる地名である。アイヌは川を川口から遡っていくので、パンケ: 手前側、ペンケ: 奥の、と考えることができるが、「マヤチ」の意味が不明である。夕張市史には「不詳とされ、マヤチ川と同系か」ともある。マヤチは mem-ot-i か？の説もあり、段丘のところに河川跡



の沼と近いがよくわからない。「マヤチ」は「マチャ」の誤用との説もあるが、同定できない。この川では現在も砂金があるそうで、砂金採りが入っていたとすれば「マチャ」も捨てがたい。しかし、次ページ松浦武四郎が残した図では「ハンケヤ」「ペンケヤ」の名称が残っており、アイヌ語では「ヤ」音が強調されている。砂金・金属ということでは、may-un-i may-at-i（金属音のするところ）かもしれない。



北炭夕張新鉱 通洞跡

1981 年（昭和 56 年）10 月 16 日に北海道炭礦汽船の関連会社「北炭夕張炭鉱」が経営する夕張新炭鉱で発生したガス突出事故が発生。最終的な死者数は 93 人にのぼり、戦後に発生した炭鉱事故の死者数としては 3 番目の事故となった。

北炭夕張新炭鉱は北炭グループが企業の存亡をかけ、最新鋭の設備を揃えて開鉱した炭鉱であった。国から補助金などを受けながら、最新の設備を導入して大規模炭鉱の開発を進めた「ビルド鉱」の一つで、1975 年（昭和 50 年）6 月に出炭を始めた。しかし、国は巨額の貸し付けを行う一方で、北炭夕張新炭鉱に対して一層の合理化を求めた。この洞通は、清陵町の炭住から、新鉱の抗口へ通勤するためのトンネル。約 2 Km 先に炭鉱関連施設があった。（2017 夕張市内自然・歴史探訪フィールドワーク資料参照）

蝦夷山川地理取調図

松浦武四郎（江別川・夕張川） 作図 池田実



松浦武四郎山川取調図をもとに池田氏が作成した図（夕張市史）。武四郎は、滝ノ上まで来ており、徒歩でキヨロカヘツまで踏査した可能性が市史には記されている。河川の名称は伝聞をもとに記したものか、上流部の名称は現名称や順番と符合せず、どの河川か同定が難しい。

オソウシ(o-so-us-i)

o:川尻 so:滝 us:(たくさん)ある i:所

ホンソーコポマプ(pon-so-pok-oma-pet)

pon:小さな so:滝 pok:下 oma:にある pet:川

カムイコタン(kamuy-kotan)

kamuy:神 kotan:村



チェプ・オッナイ(chep-ot-nay)

chep:魚 ot:群来する nay:川



滝ノ上発電所 北炭のステンドグラスがある

リイピラ(ri-pira)

ri:高い pira:ガケ

カムイウラーシ(kamuy-uray-us-i)

kamuy:神 uray:やな us:ある i:ところ

たらつ



写真は滝ノ上。川底に同様の特徴がある

ヘリベツ川(perke-pet? pet-pet?)

perke:裂ける pet:川



ユニ川(yu-un-i)

yu:湯 un:ある i:ところ

岩内

「いわない」は各地に見られる。iwaw-nay であれば硫黄 川となるが、よくわからない。各地には、iwaw-nay の他、iwaw-pet, iwa-nay など、さまざまな名称・解釈があるようだ。

夕張川は yu-par-o : 温泉の入り口の解釈が示されており、由仁についても「温泉あるところ」の解釈があるが、北海道駅名の起源(昭和 29)では、「イ・パル(その口)」とされ、「温泉」は疑問視された。しかし、「再航蝦夷日誌(松浦武四郎)」で石狩川の白い流れを篠路で見たとき、アイヌから「ユウバリに硫黄山があり、大雨が降るとユウバリの流れがここまで来る」ことを武四郎が説明されたことが記されている。夕張川の水は、常に濁った緑がかった色をしており、「硫黄の水」とされていたかもしれない。「北海道の地名」(山田秀三著)には、「ユは温泉と訳されてきたが、何も熱い湯都は限らない。・・鉱泉のことであった。」と記されている。

岩内遺跡

※由仁町指定文化財 平成6年6月14日指定

岩内遺跡は、昭和41年7月、昭和42年8月の2回にわたり夕張東高等学校教諭であった野村崇を担当者として発掘調査された。

発見されていた3箇所(1号居住跡及び2号居住跡)の2箇所について発掘調査が行われ、坏形、鉢形、紡錘車、甕形の土器のほか、須恵器破片や鉄器片が出土している。

これらの出土遺物や居住跡の規模、カマドの位置等から遺跡は擦文時代(約1200年前)のものと考えられている。

